

つむじが笑う

若林 亨

この日のレースは荒れていた。人気選手が軒並み落車して着順を大いに狂わせていた。そのたびに歓声が起きる。といっても開催初日だから入場者は千人もない。

信介は一周四百メートルのバンクが底深い沼のように感じていた。左手に握っているカップ酒を口にする沼が大きく沈んだ。

いいじゃないか、これぐらい。他にやることもないんだ。

自分自身にそうつぶやき、今のレースのリプレイを確認してからスタンドを離れた。次のレースまでは二十分ある。

信介が競輪を始めたのは大学を出て住宅メーカーで働き出してからだった。初任地の近くにたまたま競輪場があったのでふらっと立ち寄ったのが始まりだった。以来三十数年。自分の小遣いの範囲内で細々と続けてきた。ひいきの選手がいるわけでもなく、儲けたいという気持ちも強くない。他にこれといった趣味もないから続けている。妻からも理解を得ていた。すこぶる健全と思っていた。しかしこの春五十五歳で早期退職してから競輪場で酒を飲むようになった。

外のベンチに座っているとしばらくして細長い男が目の前を横切り、同じベンチの一方の端に腰を下ろした。

渡だ。大学時代山遊会で一緒に山を登っていた吉野渡だ。卒業してから一度も会ってなかったが信介はすぐに分かった。

大きい耳と広い肩幅。これがあいつの特徴だった。三十年たっても変わってない。

「おお」

「おお、おお」

お互いびっくりした声を上げてから改めて顔を見合わせた。

三年生の時は渡がキャプテンで信介は書記だった。書記は山行記録をまとめる役だ。自前の部屋を持たない同好会だったが、山行のたびに日誌を書いて年に一度冊子にまとめていた。

「冊子の名前覚えてるか？」

久しぶりの再会は山遊会の話から始まった。

「たしか『山望』だったよな」

渡は覚えていた。

「そうだ。俺たちの時は分厚く仕上がったんだ」

「そうだったか」

「渡が行くぞ行くぞってみんなを引っ張ってたから山行が増えたんだ」

「そうだったかな」

渡は苦笑いをして顔をそらした。

横から見る耳はやはり厚みがあった。

しかしそれからは話が弾まなかった。昔話は良かったが、近況になると渡の口は重く、「ずいぶん痩せたじゃないか」と信介が言った時は露骨に嫌な顔をした。耳と肩幅は当時のままだったが、胸板は薄くなり、腕も細くなっている。なんとなく元気がない。競輪場に来ていのに競輪には興味がなさそうだったので、何しに来たんだよと信介が聞くと、ホルモンそばを食べに来たという。たしかにこの競輪場のホルモンそばはファンの間では有名だった。ホルモンの量が多くてダシが濃厚なのがその理由だったが、わざわざそれだけのために来る人がいるとは思わなかった。

一杯五百円のホルモンそばの碗を持ってふたりは同じベンチに座り直した。渡は七味をたっぷりかけていた。

「いいだろう、これぐらい」

渡は何度もそう呟きながらうまそうに汁をすすった。麺をすくい上げる時もホルモンを食べる時もじっとそれを眺めてから口にする。この一杯をじっくり味わっているようだ。

「塩が制限されて何を食べてもうまくないんだ」

そう言って渡は大きなゲップをした。

「しめしめ、今のゲップで塩分が抜けたぞ」

渡は真顔だった。

渡は半年前に心筋梗塞で十日ほど入院していた。幸い軽くて済んだが、医師からは体重を落とすことと塩分を一日六グラム以下にすることを指示された。何より食べるのが大好きだった渡にはつらいことだった。ひとり暮らしなので回りからのブレイキが利かない。食品に対する知識もないので、とりあえずは味の濃い外食は止めて、食材を買うときは栄養成分表示の塩分量を見るようになった。すると何もおいしくなくなった。ストレスがたまっていらいらする。力が入らない。だから禁を破りたくなった。どうせ破るなら派手に破りたい。スリルを味わいたい。というわけでこの競輪場のホルモンそばになった。

「派手に破りたくてこのホルモンそばかよ」

信介は笑ってそう突っ込みを入れたが渡は反応しなかった。汁をすべて飲みほして、ほーと満足そうに声を上げる。

信介の方からライン交換を持ちかけたが渡は応じなかった。またここで会おうといってとぼとぼと歩きだした。後ろ姿は学生の頃よりふた回り小さく見える。肩幅だけが広いままで、細い足腰が必死にそれを支えている感じた。

なんだか痛々しかったので信介は後追いしなかった。

しばらくして立ち上がる時、自分がカップ酒を持ち続けていたことに気がついた。

レースは荒れ続けていた。七レース八レースも万車券が出た。

信介は払い戻し精算機に近づいていった。今日はこれで帰ろうと思った。十分勝ったし、このまま続けたらもう一本酒を飲んでしまえばよかった。

最後尾に並んだ時、声が出た。

「おじさん、今のレース取ったの？」

かわいらしい女の子の声だった。

振り返ると小柄な子が立っていた。野球帽を目深にかぶり、よれよれのTシャツにジーンズとスニーカー。きれいな格好ではない。やんちゃそうな中学生に見える。

信介が不思議そうにしていると、

「取ったんでしょう。やるね」

と喋って顔を上げた。と同時に大きな目が信介をとらえた。

それは嘘のように大きかった。楕円形の目にまん丸なひとみ。白目はつきりしている。ひとみは黒光りしながら揺れていて、まばたきのたびにこちらへ向かってくる。上目遣いが何かを訴えている。

変な子だ。やばいぞ。信介はそう直感して無視した。換金を終わるとすぐにその場を離れた。

帰ろうと思っていたが結局次のレースも買ってしまった。予想通りの地味な結果だったが、わずかな払い戻しを得た。さすがにもう帰ろうと出口へ向かっていたところで再びさっきの女の子に出会った。汚れたコンクリートの上に突っ立っていてまるで迷子のようにだった。

「おじさん、今のレースも取ったんでしょ。やるね」

信介は立ち止まった。大きな目で見つめられて足がすくんだのだ。

「今日は荒れたね」

「あ、そうだったな」

無理に返事をさせられたようで気持ち悪かった。

「おじさん好みだね」

別に荒れたレースが好きではなかったが、今日は勝ち運に恵まれた。

女の子は突っ立ったまま上目遣いに信介を見つめ続ける。黒いひとみは潤んでいる。

「おじさん」とまた呼びかけてきた。

「あたしお腹減ってるんだけど」

信介はとっさに顔をそむけた。やはり関わり合いにならない方がいい。

背を向けて去ろうとすると声が届いてきた。

「あたしチククっていうんだ。おじさんにまた会いたいな」

久しぶりに母校を訪ねてみようと思ったのはやはり渡と再会したからだ。他県に住むことが多かったので卒業してから一度も大学へは行ってない。実に三十年振りの訪問だった。

キャンパスも校舎も正門も東門もそのままだと思い込んでいた。東門から出たところにあった喫茶店の名前を思い出そうとしていた。並びには古本屋と銭湯と自転車屋があった。中華料理屋、ゲームセンター、不動産屋もあった。角を曲がれば大きな公園。花見やコンパでは酒を飲んで騒いでいた。

最寄りのバス停で降りて歩き始めた。周囲の建物はずいぶん変わっているが、道はそのままなので迷うことはない。しかしにわかにな不安になった。学生の姿がないのだ。大学生らしき若者はどこにも歩いてない。その代わりに制服を着た中学生高校生が歩いていて、大学へ近づくにつれてその数は増していく。

信介の記憶にある店はすべてなくなっていた。東門も消えていた。あたりは緑の少ない閑静な住宅街に変わっていて寒々しい感じがした。正門から入ろうと思ったものの、すでに信介はあきらめていた。

たしかに正門はあった。校舎も残っていた。しかし大学の名前はなかった。十年ほど前に大学は移転していて、そのあと中高一貫の私立学校が入ってきたのだった。入り口の警備員から聞いた。大学の卒業生だといっても中へ入れてもらえなかった。まだ授業中だ。中高ともに授業が終わったあと案内人が確保できたらOKという。事前に申し込んでおくことを勧められた。

正門からは広い芝生が見えた。土のグラウンドだったところだ。校舎は薄い黄色に塗り替えられていた。信介の頃はコンクリートそのままの色だった。スクールバスが何台も敷地内に入っていく。運動部の生徒を専用グラウンドまで連れて行くのだ。校舎の壁にはたくさん横断幕が吊るされていた。女子バスケットボール部 全国大会出場。ソフトボール部 県大会準優勝。女子卓球部 団体三位入賞。女子を中心に一年にふたりずつ留学生を受け入れて運動部に力を入れている。総務課所属の警備員は丁寧に教えてくれた。

大学の移転先は遠かった。見に行ったところで何の感情も沸かないだろう。

信介は帰ることにした。警備員に礼を言いキャンパスに背を向けたところで後ろから「お」と声がかかった。

渡だった。一ヶ月前に競輪場で再会した渡だ。

「何してるんだよ、こんなところで」

駆け足で近づいてきた。

「渡こそ何してるんだ」

「仕事だよ、仕事。いやいやこの前のホルモンそばのおかげですっかり元気になってなあ。全くホルモンさまさまだな」

そう言っつて力強く肩を叩いてきた。

手のひらに厚みを感じた。身長が縮むぐらいの圧力を感じた。渡の力だ。体力をもてあましていたあの頃の渡の力そのものだ。一ヶ月前と比べて見違えるほど元気になっていた。肩幅はさらに広がり、耳もさらに大きくなっている。何より笑顔だった。何がそんなにうれしのかと思うぐらい口を大きくあけて笑っている。

久しぶりに大学を見に来たらなくなっていたと言うと「へっへっへ」とばかりにしたような笑い方をした。

スーツ姿の渡をまじまじと眺めていると、その意図を察したのか渡は今ここにいるわけを話した。

この学校で図書館司書をしている。前任者が体調不良で長期休養するので一年間のピンチヒッターとして雇われた。若い頃に取っておいた資格がこんな時に役に立つとは思わなかった。別に働きたいわけじゃなかったんだが求人があったので応募したら採用された。司書というより留学生の話し相手だ。一年生は特に日本語が分からないからさびしいんだ。だから図書館に集まってくる。俺はスペイン語がちよっと出来るもんだから南米から来た子の話し相手になってるんだ。日本語の授業もあるけどなかなか進まないらしい。やっぱり自分の国の言葉で話したいよな。安心するよな。だから図書館ではもてなんだよ。

渡はがっはっはと体をそらせて豪快に笑った。

博物館の学芸員だった渡は五年前に退職していた。ずっと独身だったことも分かった。

「また会うとは思わなかったな」

今度は渡からライン交換を求めてきた。おまえの方はどうなんだと聞いてくるので信介も簡単に近況を伝えた。といっても渡のように何かをしているわけではない。競輪以外に興味はなかったし、特技や資格もなかった。妻はパートで働いている。娘は大学を卒業して公務員になっている。付け足しでそんなことを言ったらそれ以上言うことがなくなってしまう。まだ何かを聞きたがっている渡の様子を見て信介は自分が情けなくなってきた。昼間から競輪場で酒を飲んでぐだぐだしている。働けるのに働こうとしない。時間はたっぷりあるのに充実させられない。

できれば渡を避けたいと思った。競輪場で出会った時のように弱々しい渡とだったらいろいろの話ができたかもしれないが、元気になった渡は暑苦しくて重い存在だった。自分がみじめになるだけだった。

じゃあなと言って信介は歩き出した。ライン交換したことを悔やんだ。

「おい、これから一杯やらないか」

野太い声がする。学生時代の渡の声だ。

競輪場でカッブ酒を飲んでいたことを覚えていやがると信介は嫌な気持ちになった。

「写真コンテストで入賞したんだ。見に来てくれよ」

そうだ、渡は写真が好きだった。高価なカメラを持っていた。

「また会おうじゃないか」

信介がいくら遠ざかっても渡の野太い声は体の芯に響いてきた。

十月に入っても暖かい日が続いていた。信介は神社の石段に座っていた。手にはカッブ酒が揺れている。ちびりちびりと飲みながら競輪場で見かけた小柄な女の子のことを思い出していた。よれよれのTシャツにジーンズとスニーカー。そしてあのまん丸なひとみ。上目

遣いに見つめられた時は変な子だと思ったが、時間が経つにつれてあのひとみの中には何かがあると思えてきた。弱々しさの中にも強い意志が感じられたのだ。あのあと競輪場へ行くたびにあの女の子を探さようになっていた。「チク」と名乗ったはずだ。今風の名前だ。

「神社の石段で待ってるよ」

これはあの日、女の子が言った最後の言葉だ。

「おじさんとまた会いたいな」

そのあとに聞こえた。その言葉通りここで会えるとは思ってなかったが、酒を飲みきるまでは座っていようと思った。

真ん丸なひとみで見つめられた時のざわざわ感がよみがえってくる。あの時は毒だと直感した。危ない女の子だと思った。しかし媚びているようには思わなかった。毒は毒でも幸せな毒もある。ピリピリといい刺激を与えてくれる毒もあるだろう。時間が経つにつれてそんな感情が湧き上がって来たのだ。

酒が終わったので立ち上がった時、「わあっ」と声がした。

またしても渡だった。学校の前で別れてから連絡はしていなかった。もう会わなくてもいいから忘れようとしていた。

「なんでここにいるんだ」

渡は大きな声を出した。

「なんでって、渡こそなんでここにいるんだ」

信介も負けないぐらいに大きな声が出た。偶然過ぎて気持ち悪かった。最初に競輪場で顔を会わせ、次に学校前で顔を会わせ、そして今。これで三回目だ。

渡は信介以上に驚いていた。ありえないという顔で信介を見つめ、とたんに落ち着きをなくした。隠れ場所を探すかのようにキョロキョロとあたりを見回し、後ずさりして距離を取ろうとしている。

あまりの渡の慌て振りに信介は「どうしたんだ」と聞くしかなかった。

「いやいやいやいや、偶然偶然」

渡は顔の前で違う違うとばかりに手を左右に振る。キョロキョロが激しくなり「はへへへ、はへへへ」と変な笑い声をくり返して逃げるように神社の中へ消えていった。

すると「キヤー」という女の子の叫び声が聞こえた。と同時に渡が鳥居から勢いよく飛び出してきて石段を駆け下り、あっという間に姿を消した。余裕のない全速力だった。

渡の逃げ方があまりに滑稽だったので逆に信介には余裕が生まれた。神社の中に何か仕掛けでもあるのだろうかと思世物小屋をのぞくような気分で鳥居をくぐった。

あつと声が出た。

そこには大きな目があった。まん丸なひとみがあった。じろっと見つめられた。

チクだ。野球帽によれよれのシャツ、ジーンズにスニーカーのチクだ。

「おじさん、また会えたね」

まばたきでさらにひとみが大きくなった。

渡のように逃げ出さなかったのは、逃げ出す必要なんかないとブレーキがかかったからだ。もう一度会いたいと思っていた気持ちが顔に出ていた。

「おじさん笑ってる。かわいいよ」

そう言っただけだった。

信介はチクが動くのを不思議そうにながめた。競輪場では突っ立ったままでひとみを動かすだけだった。

「あ、どうも。こんにちは」

そんな風に声をかけて信介も近づいていった。中学生ぐらいだと思ってたが本当に中学生に見えた。幼くて無垢な感じ。じつくりと顔を合わせるとぼちりした目が実に可愛らしかった。

「おじさん、あたしそんな風に見える？」

チクが上目遣いに迫ってきた。

「見える見える。中学生に見えるよ」

信介は自信たっぷりに答えた。

「はたち」

「え？」

「あたし、はたち」

「あ、ごめんごめん」

チクが口を尖らせたので信介は慌てて謝った。

「そうじゃない。あたし売春してるように見える？」

売春？

「おじさんもあたしを買いたいのか？」

買う？

「あいつあたしを買おうとしたんだ」

あいつ？

ふたりして石段に腰を下ろした。並んで座ってみるとチクは存分に小さかった。膝をかかえて座る姿は本当に中学生のようだった。すねた中学生のようだった。

信介は自分がまだカップ酒を持っていることにうしろめたさを感じて隠し場所を探した。

「あたし、思ったことをすぐ口にするんだ。だからチクになったんだ」

そう言っただけだった。

小学校の頃、同級生のトラブルを先生に伝えたところ、告げ口をしたとうわさになりチクとあだ名がついた。中学に行ってもチクのままだった。高校でもチクと呼ばれた。特別からかわれているわけではなかったが、嫌で嫌でたまらなかった。開き直って自分のことをチクと呼んでいた。それでまた自己嫌悪に陥った。ようやく高校を出たものの就職することはできなかった。働いたらまたそこでチクと呼ばれると思った。

チクはふーと息を吐いて抱えていた足を伸ばし、スニーカーのかかとでこんこんと石段を叩いた。それから野球帽のつばをくるつと後ろに回してまたふーと息を吐いた。

信介も足を伸ばした。自分の足がチクの足よりもずいぶん先まで伸びたことがおかしかった。チクの真似をしてふーと息を吐こうとしたが胸の中はからっぽだった。

チクというあだ名のは分かったが、まだ売春、買う、あいつの意味が分からない。チクの横顔を眺めた。野球帽の下からはまだらに染められた前髪がのぞいて、そこだけはちらしく見せていた。チクは信介の視線を感じてない様子で、まっすぐ前を見つめていた。

渡に確かめたいことがあった。だからすぐに居酒屋へ呼び出した。

単刀直入に聞いた。神社で会った女の子を金で買おうとしたのかと。

渡も単刀直入に答えた。その通りだと。

チクが言ったことは本当だった。暇だったら遊ぼう、三万円でどうと声をかけられ、引っ掛かったふりをして一緒に歩いて交番の前でキャーと叫んだらあいつは逃げてった。全速力で逃げてった。あいつばかだよ。なんでまたこの石段に来るんだ。ここに来たらあたしに会うかもしれないのに。そして最後に、これってチクったことになるのかなと言ってちよつと笑った。

渡は観念したように首を垂れていた。ひどく後悔していた。交番に連れて行かれて良かったと言った。

何事もなくて良かった。目が覚めたよ。それにしても気の迷いってやつは恐ろしいな。むしろくしゃしたらスケベ根性が出るんだ。お恥ずかしい。でもあの子は魅力あるよな。なんというかほら、まるで少年だろう。純粋な少年っていう感じで可愛らしかったんだ。それでちよつと話をしたくなつたんだ。

そう言って苦笑いした。

渡のむしゃくしゃは学校をクビになったからだだった。図書館にやってくる生徒が少ない中で留学生たちはよく利用していたので、応援するつもりでつつい肩に手を置いたり隣に座ったりしていたのを学校側からとがめられた。生徒が嫌がっていることに気がつかなかったのだ。学校側の対応は早かった。校長に呼び出されてその場で契約解除を言い渡された。ストレスになつてましたよね、体調も悪いようですからゆっくりなさってくださいとなくさめられたが、見え見えの言葉だったので逆に腹が立った。ストレスなんて感じてなかった。やる気満々だった。

ひと通り事情を言い終えたところで渡は不意に肩をいからせた。

「ところでおまえはなんであの子を知ってるんだ」

「え？」

「おかしいじゃないか。あの子のことを知ってたのか」

渡は大きな耳を立てていた。

今度は信介がしゃべる番だった。しかし渡と自分、チクと自分、渡とチク、この三つの関係が交わってないので何から話していいのかわからない。偶然ばかりで成り立っている関係だ。不気味で気持ち悪い。渡が不思議がるのも無理はない。

始まりは競輪場だったが、そこから時系列で話すのはめんどろだった。かといってこの前の石段からだ直近すぎる。

「あの子いくつだと思う？」

そこから入ることにした。

「中学生じゃないのか」

「渡もそう思うか。俺も最初はそう思ったんだ」

「違うのか」

「はたちだってよ」

「はたちか……」

渡がなんだか残念そうな顔をしていたので信介はちよつとからかいたくなった。

「中学生だと思つて声を掛けたのか」

「まあそうだ」

「まあそうだって、それ犯罪だろ」

「そうかはたちか……」

「おまえまさか再チャレンジするつもりじゃないだろうな」

「だめか」

「あたりまえだろ。キヤァって騒がれてるんだぞ」

「はたちだったらいいだろ」

「そういう問題かよ」

話しているうちに渡はだんだん陽気になっていった。声が大きくなり肩幅も広がっていった。信介にはそれが苦々しかった。そして奇妙な気持ちも芽生えてきた。チクに手を出そうとした男。チクをたぶらかさうとした男。チクと寝ようとした男。こいつにチクを奪われではなるまいと渡が恋敵に思えてきたのだ。

酔いが回ってからは渡の独壇場だった。食べ切れないほど料理を注文して次々とハイボールをお替りする。心臓は大丈夫なのかと心配しても、その時が来たらみんな死ぬんだと受け流してますます調子を上げる。そしてからんできた。

「おまえは暗い。おまえはもてない。おまえは童貞だ。よし、これから風俗だ」

信介が相手にしないとさらに続けた。

「ひよつとしておまえもう勃たないのか。だめなのか。あきらめたのか」

信介は渡の熱量に押されっぱなしだった。どうしてこうなったんだと偶然の連続を恨んだ。顔だけに寒気がきて一瞬吐きそうになったがそれは収まった。それでもあたりが薄暗く感じて体から力が抜けていった。目に映るものすべてが漂っている。頼りなく揺れている。

「おい、聞いているのか」

渡の声はこんにやくのようだった。

「今日会った時から思ってたんだ。おまえ元気がないぞ、どうしたんだ」

こんにやくはそのまま信介の胸に沈殿していった。

クリスマスが近づいて街はひときわ華やかになった。

信介はショッピングモールの中を歩いていった。買いたいものはなかった。ただ明るい場所にいたかった。

元気がないぞ、どうしたんだと渡に言われてから自分の中でそれを繰り返し否定し続けていた。元気だ元気だ、俺は元気だと。

なるだけ明るい色の服を着るようにした。橙色の帽子や真っ赤なマフラーは目立ったが気にしなかった。そうして気持ちを盛り上げたかった。心筋梗塞で倒れた渡に元気がないぞと言われたくなかった。しかしなかなかスイッチは入らなかった。酒を飲んでもだめだった。昼間からひとりで飲むからだ。分かっているが止められない。

広いモールの一階から二階へ、さらに三階の駐車場へとひと回りしてエレベーター前のベンチに腰を下ろした。

ジャンパーのポケットからカップ酒を取り出してひと口飲んでふたをする。ふたをしても漏れる。だからポケットが酒臭い。いや体全体が酒臭いかもしれない。

エレベーターに乗り込む人の視線を感じた。子供連れが多い。子供の視線が特に痛かった。必ずこちらを見る。しばらく見つめて目をそらす。

変なおじさん、汚いおじさん、気持ち悪い、危ない人。

ベビーカーに乗せられた赤ん坊までが軽蔑してくるようだ。

三日前に元同僚からはがきが来た。孫が生まれておじいちゃんになりましたと写真付きで送られてきた。お宮参りだ。スーツ姿のそいつは赤ちゃんをのぞき込んで笑っている。俺を追い抜いて出世していった優秀な後輩だった。万事そつなくこなすオールラウンドプレイヤーで早くから幹部候補だった。俺みたいに早期退職する必要はないだろう。もうすぐ正月だから年賀状として出せばいいものをわざわざ別に送ってくるところがあいつらしい。そうだ何か祝いをしなければ。信介はベビー用品の店に向かった。

娘が生まれた時のことは思い出せない。あいつみたいに顔を近づけて笑いかけることぐらいはしただろう。歩き始めてからはすっかり妻になじんだのでそれをいいことに育児はまかせつきりにした。じゃれ合うのは楽しかった。調子に乗って泣かせても妻に抱かれると泣き止むので安心だった。

みんな昔のことだ。

専門店街にあるベビー用品店は白で統一されていた。帽子、手袋、ソックス、靴。どれも小さくてかわいらしい。出産祝いのコーナーには食器セットとガーゼタオルのセットが並べられてあった。相場も分からないし相手の好みも分からない。下手に送ったら重なってしまいかもしれない。だったら商品券の方がいいかなと迷っているところから「おじさん」

と呼びかけられてベビーカーが足に当たった。邪魔をしているのだと思って片方に寄るとまたベビーカーがぶつかって来た。

押しているのは小柄で若いお母さんだった。ベビーカーを押してやってくるのだからてっきりお母さんだと思い込んでしまったのだ。だから笑いかけてくるその顔を見てもすぐには気がつかなかった。厚めの化粧にもだまされた。

信介がはっとびっくりした顔をしたので、

「やっと気づいたね」

とチクはベビーカーを引いて隣に並んだ。

「え？ほんとに？」

「また会えたね、うれしいな」

信介はそれでも疑っていた。

野球帽、よれよれのシャツ、ジーンズ、スニーカー。その姿しか知らない信介には今目の前にいるチクは別人だった。ショートパーマのつやのある髪、真っ白なニットのセーター、黄色いロングスカート。着ぶくれているものの体全体がふっくらとした感じに思えた。なにより元気そうだった。それが信介の印象を狂わせた。

「かわいいでしょ」

チクはベビーカーをゆすって赤ちゃんに顔を向けた。

「この子は」

「あたしが産んだの」

「え」

「うそ。友達の子。子守してるんだ」

生まれて半年ぐらいのまるまるとした赤ちゃんだった。肌着を重ね着して気持ちよさそうにしている。どこを見ているのか分からないつぶらなひとみ、薄いまゆげ、広いおでこ。百パーセント可愛らしい。

ふたりは店を出て休憩用のソファアに座った。赤ちゃんはよく口をパクパクと動かし。そのたび、もうすぐだよとチクは声をかける。ミルクを与える時間は決まっているようだ。

「チクちゃん……だったね」

信介は初めてチクの名前を口にした。ちゃん付けで呼ぶことに抵抗はなかった。

「チクは止めたよ。本名に戻った」

「あ、そうなんだ」

「ミルっていうの。よろしくね」

「そうか。ミルちゃんか」

カタカナかな漢字かなと考えているのがばれた。

「口で言ったら一緒だよ」

ミルの声から少女っぽさが消えていた。しゃべり方は一緒だったが声質が太くなっていた。目はそのままだった。ひとみは丸く潤んでいる。

信介はその目で見つめられている赤ちゃんをうらやましく思った。こっちへも向けてくれないかなとミルの横顔をじっと見つめた。

「ところでおじさん、なんであの店にいたの」

赤ちゃんがミルクを飲み始めた。薄眼を開けたままごくごく飲んでいる。ミルは哺乳ビンを支え持つて真剣に見守っている。

出産祝いを買いに来たのだけど選ぶのが難しいから商品券でごまかそうかなと信介が言うと、ミルはおむつにしておけばいいよとさらっと応えた。

「いくつあってもいいんだ。助かる助かる」

それはまるで母親のように自信たっぷりだった。

「全部飲まないとだめよ。飲んだらゲボツといわないとだめよ」

ミルはミルクを飲み終えた赤ちゃんをそっと肩に抱き上げてゲボツと言わせた。赤ん坊の口からミルクがこぼれた。

「ミルもミルクで大きくなりましたって、おもんねえー」

言った本人も信介も笑わなかったが赤ちゃんはちよつと笑った。その顔を見てふたりも笑った。

「あたしたち家族みたい」

「そう見えるな」

「全然血はつながってないけど」

「ほんとか。全くつながってない」

初孫の写真を送ってきた元同僚の気持ちが分かるような気がした。他人同士でもこれだけ和むのだ。実際の孫だったらかわいくてかわいくて仕方ないだろう。

突如、信介の頭の中に渡が入り込んできた。一瞬身構えてしまった。慌てて振り払おうとしたが無理だった。

乱入してきた恋敵はいやらしい顔でチクに近づき、一万円札を三枚ちらつかせながら逃げようとするチクを強引に抱きかかえて全速力で去っていく。止めると信介は叫ぶ。振り返った渡はひと回りもふた回りも大きくなってチクを抱え込んでいた。耳は巨大なキノコだった。肩幅は防波堤のように広がっていた。

「放せ！ 消え失せろ！」

信介はソファーから勢いよく立ち上がり、何かを奪い取るように胸の前で両腕を激しく掻き回した。

赤ちゃんが泣きだした。「はい、はいはい」とミルはお尻を叩きながら軽くゆする。するとすぐに泣き止んだ。

「おじさん怖いよ」

「あ、ごめんごめん」

信介は我に返って座り直した。ミルは抱いたままの赤ちゃんに笑いかける。どこから見ても本物のお母さんだ。

そうだ、この子はミルなんだ。チクからミルに変わったんだ。だから渡を恐れることはない。大丈夫だ。信介は力強く確信した。

時間になったからとミルがベビーカーを押し始めた。

「今度どこで会えるかな」

ミルが上目遣いに聞いてくる。

「これ以上顔を合わせたら怖いな」

「あたしも怖い」

「偶然すぎるだろ」

「うん、偶然すぎる」

「じゃあこのあたりで終りにしようか」

「でも偶然を終わりにすることなんか出来るの？」

信介はその通りだと思った。偶然を終わりにすることなんてできない。会いたいという気持ちがあるから偶然を呼んでくるのだ。だったら会いたいと思わなければいい。忘れようとするればいい。しかしそれでも偶然はやってくる。これまでのことがそれを証明している。

友達が迎えに来てくれるという駐車場まで一緒に歩いた。

「でもおじさん心配だな」

「何が」

「だってどこか悪いんでしょ」

「いや、別に」

「絶対どこか悪いよ。今日会った時から元気ないもん」

何を言ってるんだ。俺は元気だ。どこも悪くない。渡と同じことを言ってくれな。

迎える車がロータリーを回っている間に信介はその場を離れた。

あつと信介は思い出した。

しまった、ひっくり返っているかもしれない。

ジャンパーのポケットに手を入れてカップ酒を確かめたがなかった。ポケットの中も濡れていなかった。

あれ、いつ捨てたんだろう。

体調はすぐれなかった。下痢が続いて食べることが嫌になっている。無理やり口にしてもゴロゴロと腹が鳴ってすぐにトイレへ行きたくなる。体力もなくなっていて歩いているとひんぱんによるける。ことにぼんやりが激しかった。テレビを見てもぼんやり。本を読んでもぼんやり。日々課せられたこともなく、気ままな毎日だったのでぼんやりを楽しむことも出来たのだが、何もしていないことがプレッシャーになっていた。

あせりの原因は渡だった。そしてミルだった。ふたりの姿がまぶしすぎた。渡は病気をしても気にせず元気に過ごしているし、ミルはチクから変身して明るくなった。ふつくらと健康そうだった。楽しそうに友達の子をあやしていた。

「おまえ元気がないぞ。どうしたんだ」

「おじさん元気ないもん。どこか悪いんでしょ」

ふたりが余計なことを言うからだ。暗示がかかったようにだんだんと調子が悪くなった。あいつらのせいだ。

そうだこいつのせいではないぞと信介はカップ酒を目の高さまで持ち上げてぐいっとすきつ腹に浸み込ませた。実際、飲んだくれてるわけではなかった。一日せいぜい日本酒三合。それもちびりちびりとやっている。

競輪場はこの日も閑散としていた。それでもレースは荒れていた。信介は外れ車券をゴミ箱に捨て、カッパ酒も飲み乾した。信介は全く勝てなくなっていた。渡に元気がないと言われてからことごとく読みが外れるようになり、人気のラインも逃し続けた。ミルに元気がないと言われてからは車券を買うのも嫌になった。しかしこれだけは止めることが出来なかった。これを止めてしまうと自分の行き場がなくなる。毎日がからっぽになる。恐ろしく退屈する。死にそうになる。そんな気がして惰性で続けていた。

投票十分前を知らせるアナウンスが流れた。これまでだったらこのタイミングでオッズを確認していたが、もうどうでもよくなっている。

ベンチに座ってぼんやり回りを眺めていると遠くに子供が見えた。歩き始めたばかりのような小さな子供だった。両手をつけて転んでいる。特別レースが開催されるときはたまに子供を見かける時はあったが、通常のレースでは珍しかった。親子らしいふたりがそばに付いていた。男の方は大柄で女の方は小さかった。三人でこちらの方へ向かっているようだったがほとんど近づいてこない。子供が右へ左へふらつくものだから親たちもそれにつられてる。

信介はいったん目を離れた。よいしょと立ち上がってすぐに座り直した。重力にも負けている。それでももう一杯飲みたくなったので近くの売店まで買いに行った。

第八レース投票締め切りのアナウンスとともにチャイムが鳴ると多くの客はスタンドに足を運ぶ。ファンファールのあと、敢闘門から選手がひとりずつ出てきてスタートラインの発車機に並んでいく。すり鉢状になった一周四百メートルのバンクを五周して三分半もすれば勝負はつく。

信介はレースを見なかった。乾いた気持ちで発車の号砲だけを聞いた。ふらふらと場内を歩いていると、さっきの親子らしい三人がまた目に入った。今度は十分に声の届く距離だった。

「いたー」と指さされた。聞き覚えのある声だった。

「おい、待ってたんだぞ」。こちらにも聞き覚えがあった。

ぼやけていた輪郭がはっきりした。渡とミル。そして子供だ。

渡とミルと子供。

三人を前にして信介は固まってしまった。驚くことも出来なかった。目の前に現れたのはばらばらの三枚の写真がくっついてできていたびつな模様だった。何が起こったのか分からなかった。

かき乱された時間と場所は記憶の戻りを咎めていた。まとまったひとつの物語が出来ることを拒んでいた。

「おじさん、この子大きくなったでしょ」

——いやあ、ほんとに大きくなった。成長が早いですね。

「いやだおじさん、冗談よ冗談。この前の子じゃないわよ。そんなに早く歩けるわけないでしょ」

ミルは真ん丸なひとみをさらに丸くして笑っている。

「おいおまえ、明日から合宿だぞ。準備は出来てるのか」

——いやあ、おじいさんも元気はつらつ。まいったなあ。

「山行記録よろしくな。今年の年間冊子は写真もたつぷり入れて分厚く仕上げたいんだ。〇Bに自慢するんだよ」

——あ、失礼しました。おじいさんじゃなくてお父さんでしたか。これはこれは申し訳ありません。お父さんでしたね。お父さんお父さん。

「何をとぼけたこと言ってるんだ。おまえの取り柄は文章をまとめることなんだからな。頼むぜ」

渡は大きな耳をさらに大きくして笑っている。

不意に暖かいものが足元からみついてきて信介はあせった。子供がしがみついてきたのだ。

——お嬢ちゃんかな。坊ちゃんかな。

子どもはすぐお母さんの元へ戻っていった。ミルは子供をひよいと持ち上げて片方の腕に抱いた。

三人ともこつちを向いている。微笑みかけてくる。

信介は三人を眺めながら微笑み返した。すると三人はいっせいに姿を消して、そこに小さなつむじが起こった。

つむじは真つ白な空間を生み、その中に三人の輪郭だけが現れた。

耳の大きな輪郭は元気になった渡だ。心筋梗塞から体調を戻し、学校をクビになってもすぐにまた次の職場を見つけてがんばっている渡のまぼろしだ。俺をあざ笑っているように見える。

丸い輪郭はミルだ。競輪場では暗くて怪しい女の子だったが、友達の子どもの世話をするようになつてから明るくなり、体もふつくらとして健康そのもの。チクからミルへ名前を変えて気持ちの切り替えも早い。ミルのまぼろしもまた俺をあざ笑っているように見える。

小さくてかわいらしい輪郭は歩き始めたばかりの子供のまぼろしだ。伸びたり縮んだりしながらこいつも俺のことをあざ笑っている。

「おまえたちは何者だ！」

信介が叫ぼうとした時、醤油の甘い香りが漂ってきた。

一杯のホルモンそばが輪郭の中に現れた。そばがすくい上げられるとさらに香りが濃くなった。

「おまえも食えよ。元気になるぞ」

渡の野太い声がする。

「おじさん、元気になってね」

ミルのやさしい声がする。

——俺は元気だ。おまえたちよりずっと元気だ。

そう叫ぼうとしたが声にならない。

たっぷり煮込まれたホルモンが一番小さな輪郭に吸いつくと子供の泣き声が出た。

「やっぱりこの子にはまだ早いよ」

「そうね、早かったわね、ごめんね」

みっつの輪郭が重なってもこもこと動き出した。そこには確かにエネルギーがあった。元気になるというエネルギーがあった。

再びつむじが起こった。ひとつになった輪郭はつむじの中でさらに大きなエネルギーとなり、つむじの中に溶け込んでいった。すると今度はつむじの方がさらにさらに大きなエネルギーとなって高速で回転しながら真っ白な空間を広げていった。

地響きのような笑い声が起こった。ごうごうとつむじが笑い出したのだ。

渡とミルと子供が再びはつきりと姿を現した。

みんな笑っている。こっちへおいでと笑っている。

信介はだらんと腕を垂らしていた。握っていたカップ酒からは残りの酒がいつまでも地面に流れ続けた。